新潟県立村上高等学校同窓会関東支部

村高

題字　宮　絢子
2013.5.15
第24号

発行人　佐藤　勝
編　集　山下　治郎
事務局　長谷川康夫
神奈川県川崎市
麻生区向原3-5-5
☎044(953)8368
ホームページ　http//www.murakou.com/~kanto/index.htm

東京での村上発見！

2013関東支部 同窓の集い ご案内

「同窓の集い」へのおさそい

この便りが届く頃には、村上は若葉の下渡山が青空に映えていることでしょう。

東京で「村上」に出会う体験をしました。歩いていたところ偶然見つけたものです。場所は首相官邸です。入り口に村上内藤藩屋敷跡と案内板が出ています。皇居（旧江戸城）に近く、内藤藩の幕府での高い位置を知ることができます。もう一つ、上野公園にも由縁のものがありました。上野大仏です。精養軒近くに小高い山があり、上野大仏の首から上がレリーフのように壁に埋め込まれています。大人の背丈くらいでしょうか。この大仏は一六三一年に村上藩主、堀直寄が寄進し、大仏殿に安置されていました。当初の漆喰像から、六m高の金銅像に作り変えられました。しかし度重なる火災で金銅の首だけが残されました。

堀氏は現在の村上の基礎づくりに貢献した人です。それから六十年程後、松尾芭蕉が村上に立ち寄ったのは、榊原氏の時代です。

このように、東京で村上を発見できる場所があります。他にもあるに違いありません。情報があれば教えてください。共有できると嬉しいですね。

でも一番の東京での村上発見は「同窓の集い」です。

開催日まであと一ヶ月余りとなりました。現在、幹事会中心に準備を進めています。ここ二、三年、若い（五十代後半）世代の参加が厳しい状況にあり課題です。この集いは、今までの繋りを結び直す良き機会となることを信じています。一人でも多くの方がご参加下さることを願っております。

会　長　佐　藤　勝
総会担当　中　村　修　平（文　中村）

2012総会の様子

○とき
平成二五年六月二二日（土）
正午より受付開始・一時開会
○ところ
スクワール麹町
千代田区麹町六―六
☎〇三（三二三四）八七三九
○アクセス
・ＪＲ中央線・総武線四谷駅
下車麹町口徒歩二分
・地下鉄丸ノ内線・南北線四谷駅
○会費（千円値下げしました。）
・男女とも　**七千円**
・平成二一年から二四年卒三千円
・新卒者（二五年卒）　無料
※会場準備の都合上、五月末日までに出欠のご返事をお願いいたします。

三つの間を持とう！時・空・仲

群れること

関東支部副会長
宮　絢子（17回）

二月末に村上に行ってきました。

「ここは三角のはずだが」と、まだまだ大雪の残るその場に立ってみました。子どもの頃、片町と上片町の隣り合ったところに「三角」と呼ばれる三角形の空き地がありました。そこに行けば年齢を超越した仲間がいて様々な遊びができました。「また明日ね」と言い合い、充実感をいっぱいにして家に駆けて帰った子どもの頃の自分を思い出しました。

子どもが成長するためには三つの「間」が必要であると言われます。それは「時間」「空間」「仲間」です。たくさんの仲間と一つ所で一緒に遊ぶ時間を持つ経験が大切だということです。仲間との遊びからコミュニケーションの力をつけたり、思いやる心を育てたり、群れることの楽しさを体験したりすることを通して社会性を身につけ、人となっていくのだと言われています。「三角」には、まさに三つの間がありました。

この三つの間は、子どもが成長するためだけのものではないのではないかと思います。大人が人間社会で意欲的に生活していく上でも時間・空間・仲

間の三つの間は必要なことだと思うからです。帰りに同僚と一杯やることが明日の活力になるなどは良くあることですが、これぞ三つの間の具体例でしょう。

実は、私達村上高校関東支部の総会を始めさまざまな会は『同窓』という軸をもった三つの間、そのものです。大人がより良い人間関係の中で心豊かな生活ができる手っ取り早い行動の一つは、「三つの間」として存在意義のある同窓の集いに参加することです。総会・ゴルフコンペ・歴史散歩の小旅行。どれでも構いません。是非群れましょう。待っています。

（練馬区在住）

盛会二四年度『同窓の集い』

平成二四年度の同窓の集いは平成二四年六月二四日（土）四谷駅そばスクワール麹町で開催されました。

晴天に恵まれ開場前から沢山の方が来られ、受付の所で「久しぶりね」「元気？」「先日はお世話になりました」と早速交流の輪が広がりました。

二四年度の参加者は一五〇名＋来賓と前年同様に沢山の方々にご参加をいただきました。

午後一時開会、二五回生の近藤さんと相馬さんの司会進行で第一部総会が始まりました。物故者に黙祷、中村副会長の開会の言葉、佐藤会長のあいさつとスムーズに運営されていきます。

続いては長谷川事務局長より会務報告と会計報告が行われました。

収入・支出は総額三、一三三、五〇七円でした

支出の部

総会費	1,296,097円
印刷費	266,57円
通信費	259,460円
維持会費払込手数料	32,440円
旅費及び慶弔費	130,750円
会議費	322,679円
同好会	11,245円
次年度への繰越金	814,259円
合計	**3,133,507円**

収入の部

総会会費・お祝い金 158名	1,278,000円
維持会費 386名	913,000円
雑収入	144円
前年度より繰越金	942,363　円
合計	**3,133,507円**

その後に、松澤監事より会計監査報告がなされ拍手で承認されました。

中野校長のプレゼン

来賓あいさつでは村上高校、中野校長がプレゼンで母校の様子を知らせてくれました。頑張ってる後輩達の姿がわかりやすく伝わりました。

第二部懇親会は村上の銘酒「〆張鶴」の鏡割りでスタートしました。あちこちに人の輪が出来て時には村上弁も飛び交います。ゲームでは村上の様々な方々より提供していただいた豪華賞品をゲットして盛り上がりました。最後は懐かしの校歌斉唱で締めました。

楽しく歓談

和気藹々の時間が過ぎ、お土産と物産展で購入した村上への思いを携えて「また来年元気に逢おうね」の声を掛け合い関東の各地に戻っていきました。

（編集部）

思い出エッセー

あの日 あのころ いまじぶん

音楽部とNコン

岸野　洋（10回）

昭和三〇年に高校に入学する前から部活は音楽部と決めていた。

歌が好きだった私は中学三年の秋、NHKの音楽コンクールの課題曲「丘にのぼれば」の合唱を聴いてから、みんなで気持ちと声を合わせる合唱を自分も楽しみたいと思うようになった。

しかし同好の男子を募って既にあった女声合唱部に混声合唱を提案する勇気も積極性もなかったので、中学での合唱を諦めていた。高校受験に備えた数か月は、村高に混声四部合唱ができる音楽部があることが励みになった。受験の苦労をほとんど感じずに合格できたのは、目の前にちらついた音楽部という餌の功績が大きい。意気込んで入った音楽部の生活は期待以上に満足するものだった。そして失敗も多かった。

卒業してから半世紀以上経過して忘れてしまっている古い記憶の中から、突然ぷかりと浮かび出る青春時代の蹉跌の中には、音楽部に関係するものが少なくない。それでも（ここは「だから」かな？）音楽部に入ってよかったと思う。

私の高校生活は音楽部を中心に回り、結構気楽で自由だった。授業をサボりさえしなければしゃかりきにならなくても、試験はほどほどのところでクリアできる長閑で平和な毎日だった。

のちに武蔵野音大の教授になった音楽部仲間の大滝雄志氏は「自由な高校生活にあこがれを抱いてひとり下宿生活を始めたが、クラスの自己紹介で新大を受験するので友だちはつくらないと言った者がいたことや、ほとんどの授業が大学受験のためのものだったこ

とに反発を覚えた」（「広域新聞サンデーいわふね」平成二一年七月五日号）らしいが、私は不平や不満の少ない「安逸の夢をむさぼる」小心で平凡な高校生だったと思う。

私がいたころの村高の音楽部は放課後の練習、夏休みの合宿、文化祭での発表、ＮＨＫ全国学校音楽コンクールへの参加などいずれも合唱が主体のクラブだった。荘厳な「グローリア」、雄大な「フィンランディア」、澄んだ和音の「アニー・ローリー」が好きだった。一年生の夏休みは寒川の小学校を借りて合宿。帰省中の大学生の先輩たちも参加するこのイベントは、長い練習時間以外は自炊するキャンプ生活みたいな感じで、初参加の私は女生徒不在を惜しみながらも底抜けに楽しんだ。この年の秋、第二二回ＮＨＫ全国学校音楽コンクールの新潟県大会に参加した。会場は新潟中央高校。県の代表になって関東甲信越大会への出場をめざして課題曲「春秋の歌」を熱唱したが、代表には女声合唱の新潟中央高校がなった。この年は都立八潮高校が前年に続いて全国の第一位になった。第二三、二四回と参加はしたが、県代表にはなれず、代表校はそれぞれ柏崎常盤高校と高田北城高校（と記憶しているが…）だった。第二三回大会の休憩中に、会場の近くのどこからか流れてくる、ピアノが伴奏する美しい曲を聴いてそのメロディに惹き込まれた。その曲が、江間章子が戦災で荒れた東京の街に、花が溢れることを願って書いたという詩に、団伊玖磨が曲を付けた「花の街」と知ったのはしばらく後のことで、その曲を聴くとあの日のやわらかい日差しの校庭の情景が懐かしく目に浮かぶ。八潮高校は二三回大会も全国一位で、二一回大会から三年連続第一位となっている。県予選を突破できなかった私は、八潮高校の三連覇に感嘆したことを覚えている。平成になってから福島県立安積女子高校（現安積黎明高校）が第六二回（平成七年度）から第六九回まで八年連続金賞を獲得していることを知る。「すごーい！」の他に言いようがない。

文化祭発表記念　昭和32年秋

第二三回大会の課題曲は土岐善麿作詞の「空遠く君はありとも」。数年前に偶然インターネットで「Ｎコン課題曲ＪｕｋｅＢｏｘ」の中に八潮高校が歌っているこの曲を見つけて聴くことが出来た。昭和三〇年代の初めに若々しく、力強く課題曲を歌い上げた彼らも今は古希を過ぎている。元気でいるのだろうか。

昭和三一年、二年生の夏には村上小学校の講堂で、卒業生と在校生の合同発表会「村高コール」があった。多くの先輩の方々が参集して合唱した盛大な会であった。その翌々年には「第二回村高コール」が開催された。

思いつく事柄を雑駁に綴ってきて最後になってしまいましたが、貴重な紙面を拝借して、音楽部にまつわりご交誼を結んでくださった皆様に感謝いたします。ありがとうございました。これからもよろしくお願い申しあげます。

（横浜市在住）

ふるさとは遠きにありて

本間　健志（定11回）

村高夜間部を卒業し、ふるさとを夜行で旅立って上野にたどり着いてから何十年、現在埼玉県は飯能市を終の棲家と晴れた日には姿の良い富士山を望めるマンション住まいに満足している。

そもそもふるさととはなんぞや〝自分が生まれ育ったところ〟簡潔に言えばそれだけのことなのだが、第二の故郷なんて言い方もある、第三、第四もあっても良いのでは、東京の会社に就職し四三年間勤め上げ勤務地は東京、大阪であったが、住まいは独身時代から現在まで随分転居している。

上京してしばらく会社の寮が空くまで、千葉県は谷津の岩舟寮にいた事がある。そこを皮切りに五反田、根津、新京成の元山、新婚時代は常盤平団地１ＬＤＫ。ここは水道が地下水で美味しく、桜並木が新京成の五香、常盤平、八柱霊園駅沿いに桜のトンネルができそれは見事だった。

１ＬＤＫが子供が生まれて狭くなり今度は東西線の行徳にマンションを買い求め転居、潮干狩りやハゼ釣りなどできて空き地も多く子供達の外遊びには事欠かないところだった。

ところが家内の両親と同居することになり都内は練馬に転居。浦安にディズニーランドが出来、下の子供が幼稚園に入る年である。

練馬区は都内二三区内と言ってもまだ畑も多く転居した頃は近くの農家が牛を飼っていたようなところであった。

その生活が落ち着いた頃に大阪への転勤辞令、やむなく単身赴任。住まいは大阪で一番東京に近いと言われていた江坂の手前（江坂は東京からの単身赴任者が多かったからと聞く）新大阪からは一つ目の東三国に住まいして、十数年単身生活を送った。休日の時間つぶしにカメラを持って京都、奈良、神戸、和歌山、伊勢果ては女人禁制の大峰山や大台ケ原と山登りまでやった。大阪を基地に関西近辺を歩き回っての単身生活を定年で終えて、練馬に舞い戻ってみたものの周りは高層マンションだらけで、見知らぬ人ばかりが多くなり余生を過ごすような場所では無くなっていた。

そこでふるさとで余生をと思い何度か村上まで足を運び住まい探しもしてみたが、気に入ったところが見つから

ず。家内の要望もあり家内の妹と行き来できる範囲で探して、行き着いたところが現在の住まいである。

飯能に住まいして、カメラの趣味を通して知り合った人から、学習塾の生徒の送迎の仕事を頼まれ現在に至っている。

私が同窓会や郷友会に参加しているのは、両親も亡くなり菩提寺を村上に置いていることや、何か生まれ故郷と繋がっていたい思いなのかもしれない。

齢を重ね住まいしたところ、それぞれの土地が第二、第三のふるさとのように懐かしく思う今日この頃です。

子供たちが私の故郷をどのように思っているのか、はたまた子供たちのふるさとはどこと思っているのか、子供たちにとっては迷惑かもしれないと思いながらふるさと関連の書物を密かに集めているのも趣味のうちで、たまに広げては遠くふるさとを思うのも楽しみの一つ。今日と言う一日一日を無事過ごしてゆきたいものである。

（飯能市在住）

飯能より望む富士　元写真はカラー

「故郷の歌」二題

井上　ミヤコ（19回）

昭和三九年四月県北羽越本線府屋駅を出発する上り一番列車は村上方面への通勤・通学の乗客で活気を呈していた。府屋駅前からの街並は商店街とはいかないまでも酒屋・魚屋・下駄屋・金物屋・食堂・薬屋・畳屋・手芸屋・建具屋・歯医者・医者・和菓子屋・雑貨屋・材木屋・旅館・銀行・煙草屋・床屋・美容院・自転車屋・牛乳屋・新聞屋・釣具屋・呉服屋・洋品屋・文房具屋・駄菓子屋等々。

府屋駅

そこでは小規模ながらも経済活動が円滑に行われていた。今でも当時の店主の笑顔や仕草までが浮かんでくる。

村上高校へ三年間の汽車通学を経て上京した私は帰郷するたびに人がいなくなり、お店も後継者がいなくなり閉店を余儀なくされた寂しさを感じていた。

あれから半世紀近く、今では街並を通過して実家までの徒歩一〇分程度…。どなたにも会わない。都会へ都会へと人口が流出して行った時代の変遷も手伝って、今は過疎の町と化してしまっている。これといった産業もなく若者を繋ぎとめる術もない町ではあったが、私たちの親世代には子どもが高校を卒業して進学や就職などで他所で生活していることに少なからず自負心と諦めのようなものがあったような気がする。私もその一人であるが帰郷するたびに目に見えない責任を感じて胸が痛むのである。結婚して横浜に住んで四〇年…。

もう横浜が故郷といっても過言ではないがいつまで経っても仮の宿りの様な気がしてならない。今故郷・府屋は同世代がしっかりと踏ん張って町の中心となって守ってくれている。「お帰りなさい！」と温かく迎えて貰うことに畏敬の念を感ぜずにはいられない。故郷即ち過疎の町ではあるが何かの集まりがあると「故郷」を合唱する。詩に纏わる言葉の重みに熱いものが込みあげてくる。

三・一一東日本大震災で被災された多くの方々への鎮魂の気持ちから南三陸町に三度お邪魔した。南三陸町は衆知のように町の殆どが多くの命とともに津波に呑み込まれてしまった。

仮設商店街が立ち上がったその一角で子ども達と遊ぶボランティアに参加した。故郷がこの世からなくなってしまう瞬間を垣間見るような複雑な気持ちにさせられた。気持ちの中で風化させてはならないと思う。機会があればまた参加したい。

東日本大震災復興支援ソングが殊更心に沁みる昨今である。

「花は咲く」　作詞・岩井俊二

真っ白な雪道に春風薫る
私は懐かしいあの街を思い出す
かなえたい夢もあった
変わりたい自分もいた
今はただ懐かしいあの人を思い出す
誰かの歌が聞こえる誰かを励ましてる
誰かの笑顔が見える哀しみの向う側に
花は花は花は咲く何時か生まれる君に
花は花は花は咲く私は何を残しただろう

（横浜市在住）

私を育ててくれた ふるさとに感謝

清水　正幸（21回）

関東には、旧朝日村出身者で構成された、関東在住者が集う

『村上市朝日ふるさと会』

があります。結成から二三年になりますが、私は、四年前に入会させて

いただきました。そのふるさと会の二十周年記念誌に投稿した文を紹介させていただきます。

「私は、旧朝日村塩野町で、大工の棟梁（りょう）であるマーと、百姓をしているガッカの間に、生まれました。大雪の時など停電することがたびたびありましたが、ともしたローソクを見ながら、マーは、『ろうそくの炎のような人間になれ』などと言っていたのを子供心に記憶があります。自分の身を削っても困っている人に明かりを照らしてあげる人間になれ、と言われたことが、私も解る歳になりました。故郷を離れて四五年、今幸せに生きていられるのも、産んで育ててくれた親はもちろんであるが、ある意味、現在の自分を育ててくれたのは、ふるさとの自然（山・川・海）であり、人間形成に大きく役立っているのではないかと、故郷の自然に感謝しております。」

私は、現在ボランティアをしていますが、不幸にも親に恵まれず、犯罪を犯した少年たちが我が家にやって来るのですが、この子たちに共通して言えることは「飢えている」というふうに感じています。愛情に飢えている子、経済的に飢えている子、そして、どちらも満たされているのですが、すぐ切れてしまう我慢のできない子。まさにこの子たちが、人間形成の一番大切な時期に、時には、泥んこだらけになって遊ぶとか、蛙（かえる）をいじめて生命の大切さを知る、ということをしてこなかった子供たちです。

両親が離婚し母親と一緒に暮らしている少年が、私に「今まで褒めてもらったこともないし、叱ってくれる人もいなかった」と言いました。この子は、最初我が家に来たときは、茶髪に、耳たぶと唇にピアスをし、言動などからどう指導していこうか、悩みましたが、約二年かけ、時には怒鳴って叱り、時には褒めてやりました。現在は、見違えるほどいい子になりました。

私は、村上高校を卒業後、埼玉県警に就職したのですが、標準語も話せない青年でした。この歳になって思うことは、人間にとって一番大切なものは、地位でも、名誉でも、お金でもない。ただ一つ「真心」である。何事をするにも真心をもってすれば必ず相手は分かってくれると信じています。

その、真心を持てるような人間にしてくれたのが、ふるさとの自然だと思っています。

私の持論ですが、自然豊かな田舎で育った人間には、真の悪人は、いないと思っています。

村上市朝日ふるさと会の菅井会長から次のような言葉をいただきました。

『人を知り人に知られて世のために尽くせば返る明日の我が身に』この言葉を大切に、これからも少しでも社会に貢献できる人間になるべく努力していきたいと思います。

（熊谷市在住）

還暦過ぎて感じること！

八藤後　和行（新22回生）

平成二三年一二月三日に満六〇歳還暦を迎えました。還暦の記念に一昨年人生再構築する為アメリカフロリダでワークショップセミナーコースを受けた時、オランダ人と撮った写真です。

今年一二月には人生付録の二歳になります。昭和四九年会社に入社したころは六〇歳なんて遠い先のことと思っていましたが、還暦を過ぎ振り返って見るといろいろなことがありました。

今、世界で最も豊かで自由な日本に暮らせることに誇りを強く感じています。東日本大震災において日本の民度の高さが世界から驚愕されました。世界で最も多くの国に入国出来るパスポートはどこの国のパスポートか考えたことはありませんか。それは日本なのです。経済大国だけでは世界に認めてもらえません。世界一の経済大国アメリカでさえ入国できない国があります。この豊かで自由な日本を作り上げた先人に深謝する事が大切だと感じます。それには新聞、テレビ等のマスコミ報道に惑わされず、日本の歴史を知ることが大切だと感じます。そしてもう一つ感じることは日本の高齢化社会です。皆さん高齢化社会についてご存知ですか。高齢化社会とは、総人口に占めるおおむね六五歳以上の老年人口が増大した社会のことです。

高齢化社会高齢化率七％～一四％

高齢社会同一四％～二一％

超高齢社会同二一％

日本は二〇一一年にはすでに二一％を超えており二〇二〇年には二七％を超えるといわれています。

ものすごいスピードで超高齢化が進んでいます。高齢化社会においても世界から注目をされています。日本は高齢化社会においても先進国なのです。どこの国も誰も経験していない社会を日本はソートリーダーとして世界に示さなければなりません。高齢化率が七％を超えてからその倍の一四％に達するまでの所要年数（倍化年数）によって比較すると、フランスが一一五年、スウェーデンが八五年、比較的短いドイツが四〇年、イギリスが四七年であるのに対し、日本は、一九七〇年（昭和四五年）に七％を超えると、その二四年後の一九九四年（平成六年）には一四％に達している。さらに総務省は二〇〇七年（平成一九年）一一月一日の推計人口において、七五歳以上の総人口に占める割合が一〇％を超えたことを発表しました。このように、日本の高齢化は、世界に例をみない速度で進行しています。

世界で何処も経験した事のない高齢化社会のソートリーダーなの

です。日本はこれからも世界のソートリーダーとしての自覚が大切だと感じます。

還暦を過ぎましたがまだまだ現役でいたいと感じ、そして自分がこの世に生まれ生きてきた証にと医療、介護、福祉の情報システム営業の仕事に携わっております。村高同窓生の若い皆さん、これからみなさんがこの同窓会を継承いて行く番です。最初、私も同窓会とは疎遠でしたがいざ同窓会に係わって役員幹事をやってみるとこれがなかなか楽しく感じられました。若い同窓生の皆さん、なんでも結構です。メールいただければ幸いです。メールアドレス kmsyato@gmail.com まで。お待ちしております。最後になりますが村高同窓生ご先輩、ご同輩諸氏のご健康と、若い皆様のご活躍を祈念しております。（川崎市在住）

私のサラメシ

中村英之（29回）

一昨年六月、「サラメシ」というサラリーマンの仕事と昼食を紹介する趣旨のＮＨＫ番組に出演した。その後、その番組が海外でも放送され、また国内でも朝の情報番組や総集編で再放送されたこともあり、国内外に住む多くの知人や恩師から、「番組を見たョ！」との連絡をいただいた。米国のロサンゼルス在住のＵＣＬＡの教授からは〝I saw you on Sarameshi. Your lunch looked very delicious!〟タイに住む知人からは、「朝、ＴＶのスイッチを入れたら中村が映っていたので出勤を一時間遅らせて見た！」とのこと、多くの方々からの反響にあらためてＮＨＫの放送力の大きさを感じた次第である。

そして、今回の番組出演を通じ、最も嬉しかったのは、三十年以上もお会いしていない村高時代の恩師・松沢先生からお手紙を頂戴できたことである。松沢先生は、一、二年生の時の担任であったほか、一時在籍していた籠球部の顧問ということもあり、出来の悪いやんちゃ坊主であった私は、散々ご迷惑をかけては、いろいろとお世話になったものである。

先生からの暖かいお言葉をいただき、目をつむれば、先生も同級生もその当時の姿のまま蘇る。当時、松沢先生は三十歳代の体育の先生ということもあり、自分たちの兄のような存在でクラスの皆に好かれ、運動会の看板に先生の似顔絵が描かれるほどであった。そう言えば、村高には個性的で素晴らしい先生方が揃っていたと思う。「中隊長」というあだ名の数学のＩ先生、私の父も習ったという柔道のＴ先生、左寄り思想家である社会のＹ先生、高い声で〝Once more〟を繰り返すＫ先生などなど、同窓会などで先生の話題になると次から次へと止まらなくなるほどである。そして思い出しながら話すその目は優しく遠くを見ているようであり、結局のところ、皆先生を好きだったことに気付くのである。

関東に出て早や三十六年が過ぎ、同級生の多くはある程度の地位につき、それぞれの分野で活躍している。その原点には村上高校があり、先生方のご指導を基礎として今の自分があることを思うと感謝の気持ちでいっぱいである。

放送後、なぜサラメシに出演することになったのか？をよく聞かれる。サラメシが製作され始めた当初は、番組の制作スタッフがいろいろな業界団体に出演依頼をしていたようで、自社の研究室に勤務する私が最も対応しやすいだろうと業界団体から推薦され、スタッフからのインタビューや面談などを経て、「私の弁当男子生活が面白い！」ということで出演が決まった次第である。ボランティアでスキー指導員をしている私は、シーズンも終盤になり、オーバー気味の体重を少しでも戻すため、野菜中心の弁当を作る毎日が続いている。

（土浦市在住）

同窓会関東支部主催・歴史散策会

第二回「鎌倉散策」

一〇月三一日（水）晴れ

（参加者男性一九名女性六名）

田所和子（17回生）

晴天の下「村上高校同窓会関東支部」のブルーの幟旗の下に参加者二五名が定刻に鎌倉駅に集合。

今回も山本副会長と私が担当させて頂いた。

散策コースは鎌倉に何度か足を運んだ事がある人でも殆ど訪れることの無い、東南の名刹を「ＮＰＯ鎌倉ガイド協会」の大熊氏の案内で廻る。

まずは「日蓮辻説法跡」へ、小町大路の辺りは鎌倉時代に武士の屋敷と商人の商家が混在していたといわれる場所で「日蓮上人腰掛の石」と呼ばれる石があった。

次は「長興山妙本寺」（頼朝の重臣であった比企一族が北条家に滅ぼされた「比企の乱」後、一族の菩提を弔うために末子比企能本が日蓮に邸を喜捨して建てられた。

昭和六年までは東京の池上本門寺と「両山一主」（一人の住職が両方の寺の住職を兼ねること）という宗門の格式高い寺の一つで二ｍを超す大燈籠には葵の紋が見られた。続いて「蛇苦止明神」を参ってから駅近くの「本覚寺」へ。二代目住職二朝は身延山にお参り出来ない人の為、日蓮の遺骨を分骨したので、別名「東身延」と呼ばれている。境内えびす堂もあり、一月には「十日夷」共々大変な賑わいである。

お腹もすいた処で、予約してある老

舗の料亭「御代川・鯉之助」に入る。
舌鼓を打ちながら、語らいの時間を過ごした。英気を養った処で「常栄寺」（ぼたもち寺）へ。日蓮が捕えられ、処刑上に送られる引き回しの折、当地の嫗（おうな）がゴマのぼた餅を捧げたことから由来する。そして日蓮は種々の奇跡から処刑を免れたという。
次の「安養院」は北条政子が夫源頼朝の菩提寺として建立した。安養院は政子の法名。本堂には本尊阿弥陀如来像と千手観音、北条政子像が安置されている。この観音様は良縁や出世を求める人々の信仰を集めている。
さらに足を伸ばし「鎌倉の苔寺」と言われている。「妙法寺」に、石段の上に苔が一面に生えていて、見下ろすと見応えがある。梅雨時はさらに美しくなるという。ここで小休止、今年も「栗の渋皮煮」の差し入れを頂き、笑顔がこぼれ会話も弾んだ。最後は「安国論寺」。日蓮が安房から入って初めて庵を結んだ場所である。右手奥に日蓮が「立正安国論」を書いたと言われる窟が残されていて、興味深かった。
歩いている内に和気あいあい、おしゃべりに夢中になる。説明に遅れてしまう一団もいて、歴史学習以上に交流に充実した一日であったと思う。参加者が増えたのも嬉しいことである。
今秋に第三回の散策会が計画されている。同窓会当日お知らせをするほか、ホームページにも掲載。ぜひ多くの会員のご参加をお願いします。

（藤沢市在住）

ゴルフ同好会「臥牛会」

「臥牛会」第五〇回記念ゴルフコンペ開催される

昭和六三年にスタートし、年に二回コンペを開催して来た伝統ある関東支部のゴルフ同好会が五〇回を迎えました。記念大会ということから前泊での懇親会を持ちました。
一〇月三日（水）会場は「高崎サンコー72ゴルフクラブ」での開催となりました。前夜祭ではいつもの打ち上げパーティーと違った余裕のある宴となり、新潟からも三人の参加がありました。楽しく語り合い懇親を深める有意義なものとなりました。最年長者は大正生まれ旧制中学卒の富樫利男大先輩で同期生の高山さんも新潟から参加されました。宴の途中では臥牛会二五年の歩みと活動状況や成績の資料配布と報告、また功労者の表彰もあり大いに盛り上がりました。鈴木亮会長は五〇回中、四九回参加と言う事に一同驚きでした。ちなみに臥牛会の歴代会長は初代が大平金一さん（旧三六回）で、長郷邦男さん（旧四四回）近五郎さん（旧四六回）川上孝さん（二回生）川村正さん（四回生）と引き継がれています。

祝　50回：25周年記念大会！

当日四日（木）は心配された台風の影響を受けることなく、プレーでは暑からず寒くもない絶好のゴルフ日和となり一日大いにゴルフを楽しむ事が出来ました。また最年長のお二人は元気溌剌としたプレーで村高健児の心意気を見せてくれました。表彰式パーティーでは記念大会という事もあり村上から取り寄せた銘酒やお米なども副賞として用意され、ここでも大いに盛り上がり散会となりました。以下、今回の入賞者を紹介します。

五〇回記念大会
・優　勝　高橋　国栄（20回）
　NET：七一
・準優勝　志田　裕（20回）
　NET：七三
・三　位　伊藤　マユ子（21回）
　NET：七四

最新コンペ報告

第五一回（春季）コンペ

春のコースではもう桜が終わっていました。かわりに八重桜が彩りを添えていました。今回はキャディー無しのセルフプレーで行いました。プレイヤー自身の判断がスコアに大きくあらわれました。五〇回記念大会では沢山の参加がありましたが今回はやや少なく一八名参加でした。でも初参加者が三名ありました。
五〇回を超えて、ついに初の女性優勝者が誕生し、優勝した伊藤さんは、優勝＆ベスグロ＆ニアピン二個とまさに、伊藤さん大活躍の日でした。

四月一三日（金）
千葉県野田市　紫カントリー倶楽部
・優　勝　伊藤　マユ子（21回）
　NET：七三
・準優勝　渡辺　正（14回）
　NET：七五
・三　位　瀬下　江二（21回）
　NET：七六

（臥牛会　事務局）

51回大会参加者

■ 村高関東支部役員一覧 ■

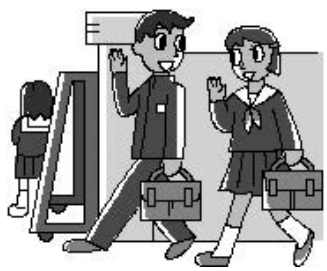
平成25年度　予定

役職	氏名	卒業回
名誉会長	小川　景士	旧40回
顧問	本間　勝治	9回
会長	佐藤　勝	14回
副会長	山本　宏平	17回
〃	宮　絢子	17回
〃	濱中　壽子	18回
〃	山下　治郎	19回
〃	中村　修平	21回
事務局長	長谷川康夫	10回
会計監査	松澤　正	15回
〃	遠藤きみ子	21回
幹事	富樫　利男	旧40回
〃	近　五郎	旧46回
〃	船山　泰三	旧46回
〃	木村　一昭	1回
〃	川上　孝	2回
〃	小田　正二	3回
〃	川村　正	4回
〃	村川　赳	4回
〃	渡辺　孝教	5回
〃	中野　素子	6回
〃	乾　良雄	6回
〃	荒木　廣	6回
〃	齋藤　實	7回
〃	林　節子	7回
〃	木藤　克子	8回
〃	中野　菊栄	8回
〃	小池　悟朗	8回
〃	関根　洋子	9回
〃	鈴木　亮	9回
〃	小野　安雄	10回
〃	小林　ミチ	10回
〃	稲葉　興武	11回
〃	本間　健志	定11回
〃	横山　昇	12回
〃	板垣　成也	13回
〃	伊藤　衛	13回
〃	菅井　眞人	13回
〃	黒岩　紘子	14回
〃	尾崎　茂	15回
〃	川村　稔	16回
〃	佐藤　三男	16回
〃	佐藤　衛	16回
〃	本間　保	17回
〃	田所　和子	17回
〃	緒方　光彦	18回
〃	中村　和憲	18回
〃	高橋　繁夫	18回
〃	菅井　初雄	19回
〃	長坂三重子	19回
〃	秋山　芳行	19回
〃	志田　裕	20回
〃	平山　恵美	20回
〃	斉藤　勇一	21回
〃	瀬下　江二	21回
〃	山崎　久男	21回
〃	美濃　忠三	22回
〃	八藤後和行	22回
〃	鈴木　弥生	22回
〃	室井こずえ	22回
〃	佐藤　裕治	22回
〃	鳥屋　栄二	23回
〃	木村　春夫	23回
〃	川又　茂	23回
〃	櫻井　繁雄	23回
〃	山本　利春	24回
〃	高橋　初雄	24回
〃	永井　賢吉	26回
〃	中村　英之	29回
〃	相馬　章	30回
〃	丹田　安夫	30回
〃	南　美恵子	31回
〃	篠崎　泉	34回
〃	前田　格	36回

24年度　維持会費拠出者一覧

25年3月末現在

回	氏名
旧34	木村　正三
旧34	竹内　二郎
旧34	平山　譲
旧39	近　直司
旧39	鈴木　喜一
旧40	小川　景士
旧40	富樫　利男
旧40	渡邊　功
旧41	長谷川和夫
旧42	斎藤　一郎
旧43	岡本　昭三
旧44	長郷　邦男
旧46	近　五郎
旧46	奥村　有功
旧47	八木下真司
1	田仲　一成
1	木村　一昭
2	川上　孝
2	横田　謙輔
2	寺井　明夫
2	竹内　功
2	本間　正英
3	田中　照浩
3	斎藤　奎二
3	佐野　清廣
3	庄司　弘
3	小田　正二
4	川村　正
4	村川　赳
4	大竹　茂久
5	藤田　桂
5	佐藤　誠
5	青木　新一
5	佐藤　セキ
5	渡邊　明犬
5	浅川　正友
5	小田　勝四
5	宗村　承子
5	稲葉　五郎
5	湯浅　慶子
5	櫻井久美子
5	遠山　雄平
5	渡辺　晋
5	和泉　義隆
5	熊崎　英二
5	佐藤　祐郎
5	永原　正子
5	敦賀　実
5	山田　學
5	菅　一郎
5	飯沼　孝
5	渡辺　孝教
6	野中千枝子
6	松田　順子
6	大平　悦子
6	泉原　富子
6	外門　功
6	荒木　廣
6	岩澤　正子
6	大平　恵吾
6	乾　良雄
6	内山　忠
7	小林　順次
7	中村　泰而
7	本間　岩雄
7	永田　康
7	水野　貞
7	齋藤　實
7	林　節子
7	佐藤　守
7	石本　保子
7	内山　安蔵
8	阿満　勉
8	宮坂　久子
8	岡田英美子
8	山口　捷平
8	八藤後剛輔
8	佐藤　タエ
8	市岡　貞雄
8	根岸みのり
8	大滝　正次
8	赤見　市郎
8	大多喜　勝
8	木藤　克子
8	星野　昌夫
8	風間　隆治
8	鈴木　良彦
8	板垣　三知
8	川崎　昇
8	宮本　哲夫
8	佐藤　彊介
8	小池　悟朗
8	高橋　正
9	三浦　誠治
9	本間　正英
9	関根　洋子
9	佐藤　雪子
9	稲垣　伸夫
9	板垣　義郎
9	小田　忠夫
9	岩崎リウ子
9	本間　勝治
9	笠原　淳子
9	鈴木　亮
9	江藤由紀子
9	佐竹　英章
9	小川　稲子
9	宮本セツ子
9	川村　伸治
10	本城　賢司
10	小野　安雄
10	村山　ジウ
10	西山　敏子
10	岸野　洋
10	小林　ミチ
10	中村　四郎
10	鶴橋　康夫
10	丹田公之助
10	工藤　孟雄
10	大滝　雄志
10	長谷川康夫
10	鈴木　富夫
10	今井　博
10	長島　昭
10	横山　恭子
11	古川　宏
11	小薬　晃
11	町田　信
11	稲葉　興武
定11	立花　俊道
定11	細井ミツ子
定11	本間　健志
12	小林　正子
12	山脇　昂
12	渡辺　慶子
12	大倉　義博
12	齋藤　紘
12	佐藤　訓子
12	当摩　幸彦
12	野口　春樹
12	伊藤　正勝
12	月居　洋子
13	前田　洋二
13	渡辺　輝男
13	高橋　翼
13	板垣　成也
13	松村　命
13	佐藤　和夫
13	伊藤　衛
13	菅井　眞人
13	佐藤　建夫
14	松永　純子
14	大庭　貞子
14	早川　玖子
14	佐藤　勝
14	菅　靖夫
14	細野　勲
14	黒岩　紘子
14	丹田　兵次
14	菅原　勲
14	菊地　秀雄
14	村山　孝夫
14	磯部　哲也
14	清野　勝子
14	土肥　直子
15	佐野　清克
15	佐藤　晴夫
15	笹本フミ子
15	伊藤満紀子
15	松澤　正
15	尾崎　茂
15	志賀　肇
15	服部　越郎
15	角替　キヨ
15	明前　壽一
15	荒井　チヨ
15	寺井　賢二
15	田村　久七
15	本保　銀二
15	青山　光夫
15	鈴木益良雄
15	小田　洋雄
15	小田　昆古
15	宮野美保子
15	竹内　精
16	中尾　仔子
16	飯島　兵八
16	碓井　憲一
16	高見澤圭子
16	鈴木　愈
16	八藤後四郎
16	増村　正二
16	二宮　照子
16	川村　稔
16	川村　忠久
16	菊地　司郎
16	中山　國男
16	佐藤　純
16	大坪　信武
16	佐藤　三男
16	小池　登
16	和田　洋美
17	市川　房子
17	倉崎テル子
17	伊与部　健
17	森田千代子
17	山本　宏平
17	本間　保
17	本間千代子
17	宮本久美子
17	富樫　芳次
17	品沢美代子
17	佐藤　笑子
17	小池正一郎
17	田所　和子
17	若穂囲　勇
17	宮　絢子
17	川島　也子
17	青木　瑞江
17	稲垣　常夫
17	服部　芳朗
17	三科　禮三
18	小堀紗智子
18	緒方　光彦
18	佐藤　則子
18	福元　公子
18	金田　昭子
18	小林　栄子
18	平山　謙
18	佐藤　敦子
18	海沼　昌子
18	濵中　壽子
18	中村　長平
18	齋藤　周平
18	中村　和憲
18	高橋　繁夫
18	五十嵐信夫
19	長坂三重子
19	坂中　良子
19	菅井　初雄
19	村山みち子
19	河口富美子
19	磯部　衛
19	名取久美子
19	新井　博子
19	吉川　梅子
19	安冨　成良
19	鈴木　実
19	井上ミヤ子
19	高橋　力
19	美濃部千恵子
19	秋山　芳行
19	大貫サキ子
19	菅井小夜子
19	青山　早苗
19	山下　治郎
20	菅原　孝
20	大沼　晶
20	稲葉　光明
20	渡辺　峰男
20	平山　恵美
20	木村　幸夫
20	畠山千恵子
20	加藤　正巳
20	佐藤久美子
20	佐藤　陽三
20	富野　竹子
20	肥本　久子
20	菅原ヒロ子
20	樋口　幸子
20	中村加和子
20	斎藤　満男
20	尾上　啓子
20	新沼たず子
20	本間　廣
20	佐藤　方直
20	山田　真吾
20	鈴木　陽二
20	志田　裕
20	本間多喜夫
20	高崎　慶一
20	菅原　悟
20	羽深　大三
定20	細越　健一
21	久保喜代子
21	飛田　芳子
21	伊藤マユ子
21	清水恵美子
21	斎藤　勇一
21	辻　薫
21	中村　金男
21	清水　正幸
21	吉田恵美子
21	瀬下　江二
21	難波　光子
21	萩原美津枝
21	山崎　久男
21	川上　幸男
21	遠藤きみ子
21	寺井　克為
21	小田　耕一
21	高橋　美徳
21	中村　修平
22	小池　博幸
22	鈴木　弥生
22	鈴木　鉄雄
22	工藤さよ子
22	美濃　忠三
22	湯川美和子
22	団原やい子
22	田村　立子
22	八藤後和行
22	室井こずえ
22	北岡　亮子
22	阿部　憲郎
22	佐藤　裕治
23	鈴木　和美
23	渡辺　次男
23	細谷　洋子
23	佐伯　ユミ
23	百瀬ひろみ
23	須崎ミチ子
23	安藤　俊英
23	川又　茂
23	木村　春夫
23	八藤後忠夫
23	井上えみ子
23	櫻井　繁雄
23	小堀美喜子
23	嶋村　良子
23	斉藤　直樹
23	鳥屋　栄二
23	加藤　明
24	広沢なお子
24	七海　陽子
24	入江　敏子
24	吉澤まり子
24	土屋　康子
24	高橋　初雄
24	高橋　重実
24	伊藤　千枝
24	村山　博子
24	神山　明子
24	仙　むつみ
24	山本千代子
24	渡邉　聡
24	遠山　満
24	野沢　清人
24	山本　利春
25	富樫三子夫
25	小林　和子
25	中田勢津子
25	竹澤　力
25	森井眞由美
25	齋藤　政彦
25	中堀　桂子
25	子安　裕子
25	須貝与志明
25	近藤　喜則
25	相馬　文幸
25	森　律子
26	高田　眞一
27	高橋百合子
27	石栗　忠彦
28	櫻井　繁子
29	大塚　寿子
29	山本　和代
29	中村　英之
30	相馬　章
30	中村　好
30	丹田　安夫
30	斎藤　司
31	南　恵美子
31	横山　素子
33	石井　八州
33	渡辺　弥生
35	唐戸　悦子
36	平田　丞
36	中島　博
38	峰田　知己



同期会便り「籠球部」

城山クラブ懐かしの宴

磯部衞（19回）

村上高等学校百年誌に次のような記述があります。「球技の団体試合として全国大会出場は籠球部が嚆矢である。」と。村高籠球部は昭和四一年度インターハイ県予選で三条高校を破り優勝。秋田県で開催された念願のインターハイ出場を果たしたのでした。三条高校は昭和三八年、三九年に全国連続制覇。それまでも全国優勝二回の強豪でした。

昭和三九年、私達一九回生十数人が籠球部に入部した時、新任教師として赴任した今井辰夫先生が顧問に就任されました。今井先生は私達に大きな目標を示しました。「インターハイに出る！」。とても高い目標でした。厳しい練習が続きましたが、私達は先生を信じて必死でついて行きました。

再び百年誌。今井先生は、「新参者の私。真夏の、真冬の合宿。休日、祭日返上の辛い練習。一日四試合にも及ぶ過酷な県外遠征等に耐えてくれた選手に心から『有難う。』と感慨深い思いに浸っている。」と記されています。全国大会では、名門福岡大濠高校に初戦で敗れてしまいました。

「城山クラブ」。当時の部員による会の名称ですが、卒業後は全員揃って会う機会もありませんでした。教師となり、定年退職後も中学校のバスケット部顧問として活躍している主将本間彰を中心に、私が連絡役となって、過般、「城山クラブ懐かしの宴」を開催することができました。

所は月岡温泉。全国大会出場は先輩の指導の賜でありました。その一年先輩の三方と私達八人。仙台、岡山、岡崎からも参上。勿論今井先生もご出席。筆者が保管中の一年生からインターハイまでの全試合のスコアブックを複写して全員に配布。それを見ながら試合内容の詳細を語る者。当時の試合用ユニフォームを浴衣の下に着込んでいて突如披露した者。砂浜での体力作り～「俺から見えなくなる所まで走って行って来い。」～足が攣って動けなくなる地獄。不甲斐なく負けた試合のこと。練習始めに羽黒神社までの往復駆け足と階段登りがありました。三年生になる総仕上げの年の元旦、雪降る神社の階段を駆け上がったところ、それを見た宮司さんが、私達を整列させ、必勝祈願の祝詞をあげて下さったことなど、夜遅くまで想い出話に花が咲きました。今井先生は、「全国的にもバスケットの名門校として知られる三条高校に快勝した時は、ステージ上の役員のざわめきが聞こえて来た。」とも。想い出話は尽きませんでしたが、私達は、勝敗よりも高い目標に向かって一致団結し、厳しい指導と練習を乗越えたことが、その後の人生の大きな糧となっていることを改めて感じあい、そして二年後の再会を約して別れたのでした。一番若々しかったのは、今井先生でした。

（さいたま市在住）

ふるさとだより「こんなところあったんだ」

在東京47年、村上にUターン10年　佐々木百合子(8回)

村上に帰って、高齢者の体操指導や、そのお手伝いをするようになりました。新しい友達も沢山でき、プライベートなおつきあいのできる友人で先輩お二人にたのまれて、ドライブをかねて買い物に外出することになりました。お二人は頭もしっかりしていて、お元気ですが歩行困難です。車に乗せて「さて、どちらに行きましょうか？」と聞きましたら「どこか、遠くの山々が見渡せるところ。」と言われました。村高を卒業するまでに、行ったこともない場所を探してハンドルを握りました。歩けなくても、車でそこまで行ける。そして何か感じることができるそんな場所です。帰省の折には訪ねてみてください。

一、「遠くの山々が見渡せるところ」

県道（北線）を北西へ、久保多町あたりのＧＳの手前で205号線に入る。バイパスの新しくできた「若鮎橋」を渡り50～100mあたりに、行き交う車に注意してハザード点灯駐車する。前方に朝日連邦、右におなじみの鷲ヶ巣山、右後方に飯豊山、真後ろはお城山、左に下渡山、名前のわからない山々も遠くに近くに見渡せるほぼ360度のパノラマです。車の中で、歓声が上がりました。

二、「静かで美しいお庭」

若鮎橋の205号線をさらに北上すると「古都路」の信号で国道七号線です。そこから約1.5ｋｍほどで「大葉澤城跡と今、人気上昇中の普済寺」です。実は行った日が雪だったのでお庭を拝見することはできませんでした。でもお寺近くの鈴木豆腐店の愉快な女将さんがいろいろ教えてくれたのは、お庭の美しさ、春のカタクリの群生が見事なことなどでした。

三、「歴史を感じて森林浴」

定番かも知れませんが門前の耕雲寺、まっすぐな杉の木立、歴史を感じさせる美しい山門、山門の一角には十六羅漢がおわします。それぞれ違いのお顔とお姿です。実は駐車場から山門まで50mくらいですが少し坂道なので歩けず、駐車場止まりでした。

四、「快適ドライブロード」

桃川峠って行ったことがありますか？村上から113号線に出る近道ですが昔は狭く曲がって上り下りで難所だったようですが、現在は快適なドライブロードです。春は所々に桜の木、秋には道路にはみ出した柿の実を車を止めていただいている人を見かけたことがあります。

ふるさとだより2「文武両道・村高の生徒たち」

学校長　中野　晋

昨年は関東支部総会にお招きいただきありがとうございました。皆様方の村高に寄せる熱き思いを肌で感じることができました。

皆様の期待にお応えできるよう職員一同、社会に貢献できる人づくりに努力したいと思います。

ここで生徒（1・2年生）の声を紹介し、礼儀正しくしっかりと挨拶ができる村高生の活躍ぶりをお伝えしたいと思います。村高の雰囲気を感じてもらえれば幸いです。

今後とも本校に変わらぬご支援とご鞭撻をお願い申し上げます。

一　学校について

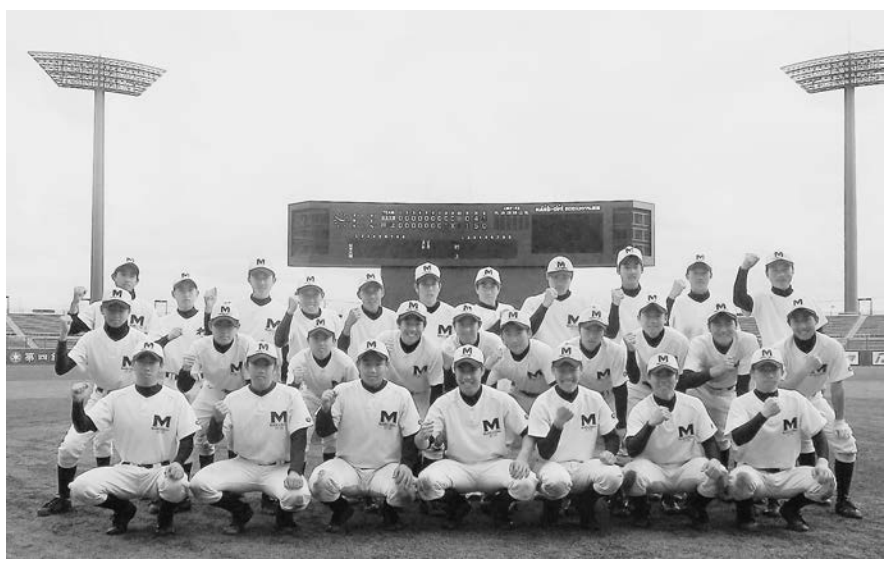
・挨拶がよく、親しみやすい先輩が多いので、学校生活の雰囲気がいい、また部活動も活発で文武両道の学校です。
・文武両道に力を入れている学校、休み時間や部活動の時間にも生徒や先生方の明るい声が聞こえる学校です。
・生徒一人一人のオンとオフの切り替えがはっきりしていて、学校生活がとても送りやすい環境になっています。

二　部活動について

・日々の部活動の中で、体力・技術の向上はもちろん、人間性や生活面も学んでいます。
・文武両道・考える野球をモットーに、日々練習に励んでいます。個々の力はもちろん、チーム力の向上へも力を入れています。

三　将来への抱負

・将来何になりたいのかまだ決まってないのですが、何になりたいかを見つけて、村上高校で学んだことを生かして頑張りたいと思います。（1年生）
・「文理・明訓を倒して甲子園」その目標のために毎日努力しています。去年、11年ぶりにベスト8までいき、みんなの自信も高まりました。なので、もっと日々の練習を積み重ねて、必ず村高初の「甲子園」を掴みます。（野球部）
・生徒会の活動をする中で、私はより多くの人々や社会を幸せにするような仕事をしたいと思います。まだ、漠然としているのですが、医療の道に進もうと考えています。夢を叶えるべく日々精進していきたいと思います。（生徒会）



○維持会費納入のご協力をお願いします！

同窓会関東支部の活動を支える唯一の財源として、皆様に年間一口（2000円）以上の維持会費をお願いしています。同封の振り込み用紙にて納入をお願いします。

昨年度は沢山の方々からご協力をいただきました。本年度もなにとぞ、よろしくお願い申し上げます。　事務局

編集後記

今回は紙面つくりに苦労しました。割り付けがうまくいかず、締め切り間際にバタバタしました。広報紙を担当して四回目の発行でマンネリと疲れと、年齢による衰えかな？と勝手に考えています。

そんな中で温かく原稿依頼に応えてくださった皆様にお礼申し上げます。

新戦力として丹田安夫（30回）さんが編集部に加わってくれました。若い感性で紙面やホームページが刷新されるのも近いと思っています。

不出来な広報紙の割り付けですが広報紙が少しでも皆さんの元気につながってくれればうれしいです。

今年の三月母校村高の卒業式では卒業生に関東支部広報紙「村高」が配布されたそうです。寄稿された皆さんや編集に関わった佐藤会長をはじめとする皆様と私にはうれしいニュースでした。

山下治郎